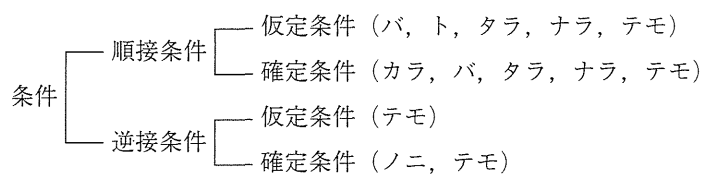


氏名(国籍)	あん さん じゅ (韓国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第2225号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	現代日本語の条件表現の論理構造
主査	筑波大学教授 博士(文学) 湯澤 質 幸
副査	筑波大学教授 P h . D . 岡崎 敏 雄
副査	筑波大学教授 高田 誠
副査	筑波大学助教授 矢澤 真人
副査	筑波女子大学教授 P h . D . 草薙 裕

論文の内容の要旨

本論文は、日本語文法研究における主要な課題の一つである条件表現について、その意味構造を命題論理学の観点から分析して論理式でもって記述し、それを通して各条件表現間の構造上の関連性を明らかにすることを目的としている。ちなみに、本論文では、条件表現の前件と後件の組み合わせのパターンを条件表現の意味構造と、また、それを論理式にしたがって整理し直したときの組み合わせのパターンを条件表現の論理構造と呼んでいる。そして、論理構造を表す論理式としては真理表、すなわち単一命題を p や q のように表し、 p と q のさまざまな組み合わせの真偽を 1 と 0 で示した図式を用いている。なお、本論文で提示した方法によれば、各条件表現間の論理的な相互関連を解明できると同時に、条件表現の全体像も把握できると主張しているが、一方において、このような分析にあっては同形の言語形式が異なる論理構造を持つことは説明できても、異なる言語形式が同じ論理構造を持つ場合における言語形式間の相違はよく説明できないと、あらかじめその限界も指摘している。

本論文は、先行研究を踏まえつつ日本語条件表現を次のように分類する。そして、この分類にしたがって順次各条件表現の分析を行っている。



括弧内は前件と後件を結びつける語。

本論文の構成は、次のようになっている。

- 第一章 序論
- 第二章 先行研究と論理
- 第三章 順接仮定条件
- 第四章 順接確定条件
- 第五章 逆説仮定条件

第六章 逆説確定条件

第七章 結論

参考文献 用例出典

第一章は、前述のような、本論文の研究の目的や方法また対象などについて述べている。

第二章は、条件表現の論理構造の分析に関わる草薙 (1977), 坂原 (1985) を取り上げて紹介するとともに, Allwood, Andersson, Dahl (1977), 近藤・好並 (1979) によりながら条件表現に関わる論理について説明している。

第三章は、順接仮定条件の論理構造を分析している。未知の前件を p , 未知の後件を q とすると, 「バ」「ト」「タラ」「ナラ」が前件・後件を結びつけている表現は,

含意 「 $p \supset q$ 」, 等値 「 $p \equiv q$ 」

の論理構造を持ち, 「テモ」の場合は,

含意 「 $p \supset q$ 」, 等値 「 $p \equiv q$ 」, 後件肯定 「 $p \perp q$ 」

の論理構造を持つとしている。その中で、実際の条件表現が文脈に沿ってどのように解釈されるのかといった問題は語用論にも関わっていること, したがって条件表現が本来持っている論理構造とその解釈が必ずしも一致しない場合もあることなど, 例外的な事例についても言及している。(以下, 逐一指摘しないが同様の言及は各章に見られる。)

第四章は、順接確定条件は含意や等値を前提に持つ推論が行われるものであることを述べている。既知の前件を $F(p)$, 既知の後件を $F(q)$ とすると, 「カラ」が前件・後件を結びつけている表現は,

「 $(p \supset q) \wedge F(p) \Rightarrow F(q)$ 」 「 $(p \equiv q) \wedge F(p) \Rightarrow F(q)$ 」

「 $F(p) \wedge F(q) \Rightarrow (p \supset q)$ 」 「 $F(p) \wedge F(q) \Rightarrow (p \equiv q)$ 」

「 $(p \supset q) \wedge F(q) \Rightarrow p$ 」 「 $(p \equiv q) \wedge F(q) \Rightarrow p$ 」

「 $(p \supset q) \wedge F(p) \Rightarrow q$ 」 「 $(p \equiv q) \wedge F(p) \Rightarrow q$ 」

のような論理式で表せ, また「バ」「タラ」の場合は,

「 $(p \supset q) \wedge F(p) \Rightarrow q$ 」 「 $(p \equiv q) \wedge F(p) \Rightarrow q$ 」

のように表せることを述べる。そして, さらに特に斜体で示した帰納推論とその他の演繹推論の違いについての説明を加えている。

一方, 反事実的ナラバ文「バ」「タラ」「ナラ」が前件・後件を結びつけているものは,

「 $(\sim p \equiv \sim q) \wedge F(p) \Rightarrow F(q)$ 」

のように表せ, 反事実的テモ文「テモ」の場合は,

「 $(\sim p \perp q) \wedge F(p) \Rightarrow F(q)$ 」

のように表せることを述べている。

第五章は、逆接仮定条件に用いられる「テモ」が前件と後件を結びつけている表現は、含意の否定である

「 $\sim(p \supset q)$ 」

で表せると述べている。「テモ」を持つ表現は、順接仮定条件における三つの論理構造と逆接仮定条件との四つの論理構造を合わせ持っているが、そのどちらに解釈されるかは周囲の状況によると説明している。なお、二つの条件を持つ「 p テモ r カラ $\sim q$ 」のような形式についても合わせて考察している。

第六章では、逆接確定条件「ノニ」「テモ」が前件・後件を結びつけている表現は,

「 $F(p) \wedge F(q) \equiv \sim(p \supset \sim q)$ 」

で表せることを述べている。なお、二つの条件を持つ「 p ノニ q カラ r 」における q の省略された「 p ノニ r 」のような形式についても分析を試みている。

第七章は、第六章までの考察を踏まえ、総括を行っている。すなわち、真理表によって得られた、各条件表現の論理構造の一覧表を提示して、各条件表現の相互関係の全体像を示している。その上に立って、日本語にお

る条件表現は、含意「 $p \supset q$ 」、等値「 $p \equiv q$ 」、後件肯定「 $p \wedge q$ 」という論理構造を持つ順接仮定条件がベースとなって、順接確定条件、逆接仮定条件、逆接確定条件が成立していること、また、これら四つの条件表現は、順接仮定条件を中心として互いに関わり合っていることなどを述べている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本語の条件表現の研究は、明治期以降今日に至るまで積極的になされてきた。そして、数多くの成果をあげてきた。しかしながら、そのほとんどが条件表現そのものの意味論的、構文論的な分析を行うにとどまっており、条件表現そのものや、またその背後にあってそれを支えている前件と後件の論理的な相互関係を解明しようとした研究はないに等しい。

このような状況のもとで、本論文は命題論理学に着目し、論理式でもって前件と後件の意味的相互関係を記述し、それを通して条件表現の論理構造を解明しようとしている。本論文第一の意義はまさにこの試みの中にあるとすることができる。

前件と後件の意味的な組み合わせのパターンは、具体的な各条件表現の詳細な分析と真理表によるその記述を通して簡明な形で提示される。本論文は、この作業を積み重ねることによって、各条件表現間の相互関係を明らかにしようとしているが、これは妥当かつ有効な手段と考えられる。言うまでもなく、このような方法で日本語の条件表現の分析を徹底的に行った研究は外になく、ここに本研究第二の意義が見いだされる。

上記のような方法による各条件表現のパターンの比較は、各表現の論理的な相互関係を浮き彫りにし、最終的には日本語の条件表現の全体像を提示することに通じる。もとよりしかるべき目的と方法とによって示されたこの全体像は、単に新しいというだけでなく説得力に富んでいる。ここに本論文最大の、第三の意義が認められる。

以上、本論文はその目的、方法等からしてユニークかつ意欲的であり、その結論も妥当と認められる。したがって、当該分野における今後の研究に大きく貢献するものと評価される。

ただし、筆者も論文において折々述べているように、論理構造からの接近だけで条件表現に関わる言語学の問題が十分解決できるわけではない。また、論理構造に関わる語用論的な問題も多々残されてもいる。

このように課題が論じつくされているわけではないけれども、それによって本論文の価値が減じるわけでもない。すなわち、著者に対しては、今後本論文を土台とした、日本語の条件表現のさらなる研究が期待される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。